

## 曲目解説

### 各校演奏

#### ● ミニ・シンフォニー 変ホ長調 Miniature Symphony in E $\flat$ major

原 博  
Hiroshi Hara

2002年の吹奏楽コンクール課題曲。その年の課題曲は「吹奏楽のラメント」(高昌帥)、「追憶～ある遠い日の～」(岡田 宏)、「吹奏楽のラブソディア」(足立 正)の4曲でした。演奏された方も多いのでは?少人数ながら全国金賞の松本市立鎌田中学の演奏が印象的でしたね。この曲はいわゆる「ソナタ形式」の若い生まれたての姿を示しています。

作曲者の原博氏は、東京芸大の作曲科を卒業後、パリ留学、1962年ニース国際作曲コンクール第一位など活躍し、「交響曲」「ヴァイオリン協奏曲」、マーチ「スタウト・アンド・シンプル」などの作品で知られています。残念ながら、多くのバンドの発表を待たず、その年の2月13日にお亡くなりになりました。

#### ● シャウティン・ライザ・トロンボーン Shoutin' Liza Trombone

H. フィルモア  
Henery Fillmore

作曲者のヘンリー・フィルモアは10代の頃からいくつかのペンネームを使い様々なジャンルの作曲をしてきました。作曲家、バンド指導者、教師、出版者、エンターティナーと様々な肩書きを持ち、多くのバンドの指揮をし、情熱的な指揮で知られていました。15のトロンボーンをフィーチャーした曲があり、その中で最も知られたラグです。

#### ● 喜歌劇「微笑みの国」セレクション Das Land des Lachelns

F. レハール/ 鈴木英史  
Franz Lehar/ Eiji Suzuki

ハンガリー系オーストリア人作曲家のフランツ・レハール(1870～1948)は、流れるような美しい旋律とワルツのリズムを盛り込んだオペレッタを数多く作曲し、この分野に大きな業績を残しました。代表作には、ワルツ「金と銀」やオペレッタ史上空前の成功を収めた「メリー・ウイドウ」などがあります。

「微笑みの国」は三幕のオペレッタで、1929年ベルリンで初演されました。物語の舞台は1912年のウィーンと北京。将校のグストウル・フォン・ブレーツに求婚されたリーザは、それを断って相思相愛の仲にあった中国の王子スー・チョンとともに中国で暮らすことになりました。彼女はまもなくグストウルを中国に呼び寄せますが、彼はスー・チョンの妹のミーと恋に落ちます。リーザは中国においては自分は結局いつまでたっても異邦人なのだ悟り、スー・チョンとの愛を諦めて故国に帰る決意をします。グストウルもまた、ミーに涙の別れを告げ、リーザとともに中国を去るのでした。スー・チョンはミーを慰め、「不幸の中にあっても気高さを失わず、微笑みを持ってそれを受け入れよう」という、彼らの宗教の教訓を説くのでした。オペレッタでは初めてハッピーエンドに終わらず、オペレッタの軽快さの中に人生のペースと哀愁を盛り込む事に最も成功した作品といえます。このセレクションは「序曲」「中国風パレエ」「蒼い塔のサロンでは」「婚礼の行列の音楽」「君こそわが心」等を自由に構成したものです。

#### ● トッカータとフーガ ニ短調 Toccatà and Fugue in D minor

J. S. バッハ  
Johann Sebastian Bach

バッハは18歳でアルンシュタットの教会のオルガン奏者となり、当時最大の音楽家の一人であったブクステーデの華麗なオルガン演奏を聴いて大きな感銘を受けました。その結果生まれたのが、この壮麗な「トッカータとフーガ」です。「トッカータ」はイタリア語で「鍵盤にふれる」という意味で、即興的に躍動する感じで演奏される音楽をさしています。

バッハのオルガン曲の中で最もよく知られた曲であるが、それはストコフスキーのオーケストラアレンジによるところが大きいのではないだろうか。ディズニー映画『ファンタジア』も印象深い。音の魔術師ストコフスキーの編曲のみならず、ジャズや様々なソリスト達によって、演奏されている。吹奏楽では、ライゼン、ハンスパーガー、最近では森田一浩が伊奈学園のために書くなど、様々な編曲がなされている。本日は藤田玄播の編曲でおおくりします。

● トリステザ  
Tristeza

ハロルド・ロボ／真島俊夫  
Haroldo Lobo/Toshio Mashima

A.ジルベルトやロス・マチュカンボスの歌で知られるサンバの名曲。しかしなんと言っても、この作品を広めた一番の功績はバーデン・パウエルのギター演奏なのではないでしょうか。タイトルは「悲しみ」という意味で、原曲では「悲しみよ、お願いだから去ってくれ。もう苦しみはたくさんだ。私は、あの喜びの生活に戻りたい。ふたたびサンバを踊りたい・・・」と歌われます。悲しみ、というよりも、それを振り切ろうとしている心情を歌った曲なのです。ニルティーニョの作詞・作曲で、始めはカーニヴァルの曲集の一編として発表されましたが、1965年に作曲家のアロルド・ロボが加筆して書き改め、翌66年のカーニヴァル用に録音、同年度の大ヒット作となった作品です。

93年のニューサウンズインプラス収録。他に「スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス」「サンダーバード」「アメリカン・グラフィティーV」などが収められています。ちなみに93年はJリーグが開幕し、ユーミンの「真夏の夜の夢」が大ヒットした年です。

● スクーティン・オン・ハードロック

ディヴィッド・ホールジンガー  
Scootin' on Hardrock ( Three Shot Scat - Jazz Dance) David R. Holsinger

ホールジンガーは教会の居住音楽家として活躍する傍ら、優れた吹奏楽曲を数多く手がけ、オストワルド賞も二度受賞(1982・1986)した実績を持つ。その作品は独特の雰囲気を持ったドラマティックな展開のものが多く、高く評価され、根強い人気を有する。ところが、この曲はこれまでの作風とは異なり、力強い音楽ながら、何となくメランコリックな雰囲気も漂わせており、ホールジンガーの異色作として注目される。1999年に出版された。タイトルの意味は「ハードロック通りを走り去る」となるが、これは作曲者の住んでいる街に実際にある、通りの名前に由来している。ハードロック通りは、かつて街の中心として賑わっていたが、現在では寂れてしまい、近道をするときにしか使われなくなってしまったとのこと。これを偲んで作曲された作品で、「三つの短いスキヤット・ジャズ風の舞曲」というサブタイトルが付いており、ジャズ風の音楽で、速一緩一速の三部構成となっている。最後は通りが賑やかだったころをドライブの効いた音楽で描きながら、エンディングへと突き進む。(13回ジョイントコンサートプログラムより転載)

13回といえば市川文化会館でしたね。市川西高が吉田先生の指揮で演奏しましたね。

● ダイナミカ (祝典序曲)  
Dynamica (Festive Overture)

ヤン・ヴァンデルロースト  
Jan Van der Roost

NEC 玉川吹奏楽団創立40周年を記念して委嘱した作品。指導者の稲垣征夫氏は以前からヤン・ヴァンデルローストに注目していて、その作品を紹介し広めてきていた。日本で初めて氏に作品を委嘱したのも稲垣氏である。(長野市民吹奏楽団のための「オリンピック」)この曲を初めて音出したとき、その作品の素敵なことに思わずニヤリとしたそうである。タイトルの「ダイナミカ」は NEC が電気関連の会社であることから、その動的な動き、吹奏楽団の活躍してきたそのエネルギーをイメージしてつけられた。曲は祝典的な導入に始まり、活発でエネルギーに運ぶアレグロ、中間に穏やかな場面を配して彼らの活動的な面と和やかな面を表出している。これは彼の彼らに対する心遣いであるが、ここに氏の人柄が良く表れている。